法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-15

近世小謡本出版の研究 : 謡曲の普及と版元の諸相

HARA, Yachiyo / 原, 八千代

(発行年 / Year)
2024-03-24
(学位授与番号 / Degree Number)
32675甲第588号
(学位授与年月日 / Date of Granted)
2024-03-24
(学位名 / Degree Name)
博士(文学)
(学位授与機関 / Degree Grantor)
法政大学 (Hosei University)
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030501

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	原　八千代
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	第 845 号
学位授与の日付	2024 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査　教授　小林　ふみ子
	副査　教授　宮本　圭造
	副査（学外）信州大学教授　速水　香織

近世小謡本出版の研究
―謡曲の普及と版元の諸相―

この論文の方法と意義

本論文は、主要な謡曲（能楽の詞章）のさわりを集めた小謡本が江戸時代を通じて、当時、出版業が栄えた上方（京・大坂）および江戸においていかに多種多様に出版されたかについて、総合的に研究したものである。

中世に芸能として成立した能楽は、近世に入って武家の式楽としてあらたな展開をみせたが、庶民のあいだでも、その詞章すなわち謡曲をうたうことが広く行われた。木版印刷による出版業の隆盛によって版本のかたちでさまざまな書物が流通したこの時代、謡曲も各家元の監修のもとに数多く出版される。それら一曲をまるごと出版する謡本に対して、各曲のさわりのみを多数集めて刊行したものを小謡本という。

能楽研究において、演劇たる能楽のテキスト部分にあたる謡曲の、各流派における標準的な詞章を載せた謡本は重視されてきた。これに対して、各曲のごく一部を抜粋して並べ、趣味的な利用に供する小謡本は、役者が上演する劇との関係が希薄であるだけに、能楽研究では周縁的な扱いを受けてきた。能楽研究の泰斗、表章による先駆的な研究以降、まとまったかたちで研究の俎上に載せられることはなかった。

本論文は、そのような小謡本に対して出版研究の観点から意義を見出し、序論、全2部 7 章および付論、さらに資料編 3 篇にわたって近世を通じた刊行状況を明らかにし得た労作である。本研究は、現在に残る約 900 種の小謡本の調査に基づき、この時代全体を通じて各版元がいかにさかんに小謡本を重要な商品として刊行したかをあきらかにしたことによって、当時におけるこの種の出版物の社会的役割の大きさを照射した。寺子屋教育などで教材として利用され、この時代の人びとの基本的な教養の一角をなした書物がいかに供給されたのか、その全体像を捉えたことの意義は大きい。

論文の目次

はじめに
序論　近世小謡本出版研究の意義と方法
第一部　上方の小謡本と版元
　第一章　京都の小謡本の始まりと展開―寛永から宝永まで―
　第二章　京都の小謡本と版元―謡本の山本長兵衛、往来物の菊屋喜兵衛・菊屋長兵衛・菊屋七郎兵衛―
　第三章　大坂の小謡本の始まりと展開―明暦から幕末まで―
　第四章　往来物としての小謡本―寺子屋教育との関連―
第二部　江戸の小謡本と版元

第一章　江戸の小謡本の始まりと展開―寛文から享保まで―
第二章　能面図入小謡本の流行―享保から幕末まで―
第三章　鱗形屋孫兵衛と蔦屋重三郎の小謡本―安永・天明の実用書の編集方法―
付論　地方の小謡本出版
結論
資料編
小謡本一覧
部分謡本刊行年表
部分謡本版元一覧

各章の要旨と評価

はじめに

概要　小謡本が多数の版元から総計 400 種以上が刊行された、その背景となる需要はどのようなものであったか、多数の版元が相互に相違はあるとはいえ同質の書物を出版し続けたのはなぜかを解明することで、近世出版文化の新たな側面を見出すという目標を掲げ、全体の構成を述べる。

序論　近世小謡本出版研究の意義と方法

概要　先行研究がほぼ表章『鴻山文庫本の研究』(1965) のみであるという状況をふまえ、この時代に膨大に刊行された小謡本を出版史や教育史に位置づけることでそれらを意義付け得ることを述べる。前提として小謡本は 18 世紀前半に謡本の刊行量を超えて以降、刊行量が増大すること、その時期に出版の先進地であった京都中心の時代から、大坂・江戸での刊行が増える時代となることを数字によって具体的に裏付ける。その状況は小謡本が版元の裁量が大きく小版元でも参入しやすい出版物であったことによってもたらされたことであることをふまえ、以下、地域性と版元の個性に注目することを述べる。資料として謡本・部分謡本（小謡本含む）版元一覧を付す。

評価　法政大学鴻山文庫の 400 種超、早稲田大学演劇博物館・日本大学文理学部のかく 100 種以上の所蔵機関を中心とした精力的な調査の結果としてデータに基づく説得力のある小謡本刊行状況の全体像を提示し得ており評価できる。ただし、各伝本の奥付に示された刊年が果たして本当に刊行された年なのか、古い刊年のまま版元名のみ入れ替えて出された可能性も否定できないという点に留意するとともに、その点を意識した記述があってよかったのではないか。また、前提として小謡本は具体的にどのような場面でどう享受されたのか、日記その他周辺資料も用いて論じてほしいところであった（たとえば『鸚鵡籠中記』には記載が見られる）。

第一部　上方の小謡本と版元

第一章　京都の小謡本の始まりと展開―寛永から宝永まで―

概要　近世初期に趣味的に刊行された古活字本の小謡本をさまざまな版元が模倣した様相を分析する。それらの版元が子どもや教養の低い層も含む一般普及、経費削減を目指したこと、一方格式ある版元が謡の上級者たる、上層階層と考えられる人びとの需要に応じて作る部分謡もあり、以後につながるさまざまな工夫をした本も出されたことを述べ、京都の謡人口の層の厚さに対応していることを指摘する。

評価　諸版の体裁・構成を細部にわたって比較して改変を指摘し、その背景・理由を推測する手法は説得的といえる。小謡以外の部分謡も視野に入れ、種類ごとに詳述したことで、この時期の京都の謡曲文化のありようを描出し得ている。本章はじめ数カ所で言及される版元田中治右衛門は俳諧活動や浮世草子・歌舞伎との関連が知られる人物でもあり、そのあたりに他ジャンルとの関係を考える手がかりもあったのではないか。

第二章　京都の小謡本と版元―謡本の山本長兵衛、往来物の菊屋喜兵衛・菊屋長兵衛・菊屋七郎兵衛―

概要　謡本出版の老舗山本長兵衛は小謡本でも特徴的で専門性の高い本を出していたが、天保期を境に衰退に向かい一般向けの編集も行うこともあった。往来物を得意とした三軒の菊屋が下河辺拾水や松川半山らの口絵や挿絵を多用する、用途を示すなどといった刊行の工夫と状況を分析する。そのうえで同じ表題で複数種をくりかえし刊行した例を比較し、前者が手間をかけた複雑な刊行方法を採っていたのに対し、後者が需要に応じて要領のよい編集を行っていたことを論じる。

評価　本章でも小謡以外の部分謡本を含め、それぞれの版元の刊行した書物を始めから終わりまで網羅し、全体像を示し得ている。

第三章　大坂の小謡本の始まりと展開―明暦から幕末まで―

概要　17 世紀以来、幕末に至るまでの当地の小謡本刊行を概観する。京都の模倣から始まりながら、商業都市大坂では多くの版元が商売上のたしなみを身につけるという実用性を意識した種々の特徴的な小謡本を生みだしたことを描出する。主要版元がこぞって子ども向けに学習記事を併載、絵入にするなどの工夫をしつつ効率的な編集が行われたこと、さらに広域販売のために奥付を連名にした出版が早く行われたことも指摘する。

評価　各版元の刊行物につき、内容や表記の工夫から版面や挿絵までていねいに比較することでそれぞれの工夫を目に見えるかたちで提示し得ている。ただし最初の大坂版の小謡本として検討される近江屋版については、著者も刊記に不自然さを看取するように、版元名をあとで入れた可能性もあり存疑とすべきか。また版元間の連携の様相を一覧にしたことは、他種の刊行物も含めた版元研究につながる貢献といえる。

第四章　往来物としての小謡本―寺子屋教育との関連―

概要　教育史における研究の蓄積を土台に、当初は大人向けであった小謡本が 18 世紀初頭以降、教育的利用に供する往来物の一種として用いられることを想定して作られるようになる過程を追い、京都で始まり、商都として教育的需要の高かった大坂で発展、それが各地で展開されたことを述べる。それは編集方針や内容にも影響し、内容としてもそうした需要に応える往来物的要素を取りこむようになるが、とりわけ大坂版に多く、大坂の小謡本の特徴をなす。小謡本編集の可変性が版元の創意工夫を誘発し、往来物としての発展に導いたことを論じる。

評価　小謡本の特質が教材として多様な発展を見せる要因になっていることを論じる。第一部の上方編の最後に本章を配置しているが、上方に限定されるものではない。上方においては寺子屋で謡が教授されたこと、大坂版の特徴をなすといったことはあるにせよ、位置づけには再考の余地があるかもしれない。

第二部　江戸の小謡本と版元

第一章　江戸の小謡本の始まりと展開―寛文から享保まで―

概要　江戸独自の出版の道を切り開いた版元松会による京都の模倣から始まった江戸の小謡本出版において、徐々に独自の特徴ある構成をもつ小謡本が成立する過程を追う。とりわけ 18 世紀初頭には娯楽として宴会の場などでの使用を想定し、独自の「一口謡」「肴謡」という、従来の小謡よりもさらに短い一節をまとめ、多くの珍しい番外曲を含む冊子が工夫されるとともに用途別に編集した実用的な構成へと変化したさまを描出する。

評価　本章においても、曲目の構成や版面を具体的に比較し、各版元の工夫を描出し得ている。上記の江戸独自の傾向について、「上方とは異なった小謡の受容のあり方」のさまを見ているが、とりわけ短いものが好まれた点は、江戸小咄とも俗称される簡潔な行文で短くまとめられた笑話集の流行が始まる時期にやや先んじるだけに、共通する好尚を指摘してもよかったか。

第二章　能面図入小謡本の流行―享保から幕末まで―

概要　能面図入の形式は上方でも行われたが、上方と江戸とでは参照した書物の違いから形式に相違があった。その背景に観能の機会の多寡を背景とした謡文化の浸透度の相違をみる。さらに江戸の小謡本の目立った特徴といえる能面図掲載の背景に、江戸では浮世絵や絵入本を得手とした版元が多く、この種の書の出版にこぞって参入したという地域の特性が反映していることを述べ、黄表紙などの戯作における受容にも言及しつつ、酒宴などの場での小謡の普及を論じる。

評価　書物編集方法の分析から、謡曲受容をめぐる地域の文化的相違を指摘したこと、能楽界においては大事件であった観世元章による明和改正謡本の一件が小謡本出版に影響しなかったと論じたことによって、版元の出版という営為を超えた、謡文化の解明につなげ得ている。戯作における受容については、わずかな例の紹介にとどまっているが、さらに発展の余地があるのではないか。

第三章　鱗形屋孫兵衛と蔦屋重三郎の小謡本―安永・天明の実用書の編集方法―

概要　江戸の地本（ローカル出版）の版元として老舗といえる鱗形屋、およびその出版形式を継承した西村屋与八と 18 世紀後半の気鋭の版元蔦屋を小謡本出版において比較することで、その相違を照射する。すなわち、前者は近世初期の京都の光悦謡本にさかのぼる伝統的な造本への志向を示しているのに対し、江戸の鶴屋喜右衛門や大坂の大野木などの小謡本を巧みに利用しながら当世風に仕立て上げる手際を見せることを指摘する。

評価　鱗形屋と蔦屋という 18 世紀後半の江戸の出版界における新旧の版元の勢力の逆転は各方面であきらかにされてきたが、その要因が小謡本のような一般的な実用書にも看取できることを確認し得ている。

付論　地方の小謡本出版

概要　調査によって確認できた 45 軒の地方の版元のうち、関東近郊に着目する。野州、甲州など比較的江戸に近い地域では江戸版の覆刻や模倣が行われ、信州では覆刻も一部で行われるとともに各地で独自版が作られた。その他、独自の編集を行った地方版も少なからずあるが、喜多流など下掛系の流派のものが多いことを指摘する。背景として薬の流通網にのって小謡本が地方に将来されたことを述べる。

評価　小謡本出版にとどまらないことを提示して、前二部を補完し得ている。

結論

概要　各部各章の概要を提示したうえで、全体をまとめる。まず、地域性について、京都で始まった謡本が各地で発展するなかで 18 世紀末以降大坂の版元が中心となって二都・三都で流通する小謡本が作られるようになること、その背景に上方の謡文化の需要層の厚さがあること、江戸では庶民向けの娯楽本などを手がける版元が能面図入りなどの上方とは異なる特徴を持つ本を制作したことを指摘する。また編集にあたって書名、表紙や目次その他の体裁に、現代とも通じる工夫が行われ、そこに地域差があること、付録において多彩な工夫が行われると同時にコストダウンの努力がなされていることを述べ、そこにそれぞれの版元の個性が反映されていることを強調する。さらに小謡本の重要な役割として、謡曲の一般化の道を作ったこと、それによって文化や教養を広く普及させた功績を述べてしめくくる。

評価　本論文とその意義を的確に概括している。全体としていえば、小謡本が各版元の出版物全体のなかでどのような位置づけになるのかという視点もあってよく、また「近世」を冠してはいても明治以降の消長についても言及がほしいところであった。

論文全体の評価と審査結果

本論文は、現存する小謡本の主要コレクションを網羅し、刊行された小謡本のほぼ全種といってよい多数の伝本の調査にもとづき、それぞれの曲目の構成や配列、版面、挿絵にいたる精緻な分析によって支えられている。その膨大な基礎作業に基づき、小謡本出版を系統立ててその全体像を把握し、近世日本における謡曲文化とその地域性を明らかにすると同時に、一定の枠組みの定まった実用書の編集・出版という切り口から三都の出版動向と各版元それぞれの営為を描き出すことに成功している。近年活況を呈している、往来物その他の実用書出版の研究にあって、この分野から歩を進めた功績は大きい。

本学学位規則により、最終試験として 2023 年 9 月 7 日に公開の場で口頭試問を行った。原氏より論文内容に関して適切な説明が行われ、小委員の質問に対しても的確な回答がなされた。本論文は、広く謡曲文化、出版文化史、また教育史にまたがる多面的な学術的価値をもつ研究として、審査小委員会は本論文を博士（文学）の学位に相応しいものと認め、合格と判断した。